

1. 弟からのむちゃぶり

王国の北部に位置する不毛の大地には、多種多様な魔物が生息している。

狂暴で残忍、人間も動物も肉としか思っていない奴らは戦闘能力が高く、非常にタフだ。

よって相手が一体だとしても討伐するとなると隊、もしくは軍を編成して向かわせるしかなく、駆逐することは現実的ではない。

よって我が国では、北の国境線にある防衛壁沿いに、魔物の侵入を阻む結界を張っていた。

けれどもとても、広い範囲に結界を張る必要があるため、維持するには膨大な魔力が必要になる。

数時間置きの交代要員も含めて、半日維持するだけでも国の魔術

師の約半数が行わなければならない。

その上でたった数時間結界に魔力を流しただけで、大きな疲労感に襲われるのだ。

しかし、この国にはその例外となる存在があった。

王家直系の子孫——つまりところ王族だ。

王家の血を引く人間ならば、誰でも一人で簡単に結界を維持出来る。そして他の魔術師に比べたら、圧倒的に疲弊が少ない。

朝から晩まで魔力を送り続けて、今日もよく働いたな〜で片付くぐらいの疲労感で済むのだ。

そういうこともあって、この国の王族の一番の仕事は、出来るだけ王族のみで結界を維持し続けることであつた。

かくいう私も、この国の王族。もつと言え、現女王。

こうして今も、結界に魔力を送るための装置である水晶玉に右手

で触れて、じっとしている。

朝から夕方まで、結界に魔力を送り続けること。これがこの国の王としての、責務なのだ。

基本的にはそれさえしていれば、何をしてもいい。

「……そう。分かったわ」

静かに聞いていた報告に、問題ないと応える。

——とは言っても、内政に関してはこの男に丸投げしているのだけど。

「姉さん、また隈が濃くなってるよ。やっぱりちゃんと、眠れてないんじゃない？」

「……大丈夫よ」

今に始まったことじゃないし——と、言わなくてもいいことを呟けば、弟の形の良い眉がきゅつと寄る。

そしてそれからすぐに、はああ、と盛大な溜め息を吐かれた。

「確かに姉さんが心配性なのは今に始まったことじゃない、けどね。たまには気を緩めてゆっくり休まないといつかは体を壊すよ」

またいつものように始まったお小言に、私はゲンナリとしてしまった。けれど気を取り直して、控え目にお伺いを立ててみる。

「じゃあ、たまには代わってくれても……」

「それは無理。一日中じつとしとくなんて、ぼくしんじやう」

イイ年した長身の男が可愛い子ぶっても腹が立つだけだ。

この野郎、とやたらキラキラしい顔を睨むが、我が弟はどこ吹く風、という様子で鼻を鳴らした。

「交代はやだけど、それ以外の方法で心を休めてほしくてさ。実は俺、いい人見つけてきたんだよね」

「……え？ いいひと？」

何の話だ？と首を捻ると、弟のロレーシュは得意気に胸を張った。長椅子に座って右手をテーブルの上にある水晶玉に乗せている女王と、その前に立って腰に手を当て、ふんぞり返っている王弟。

学術院の学生達は、希代の秀才と謳われた卒業生であるこの男が、姉の前でこんな態度をとっているだなんて、想像もできないだろう。「そう。見つけてきたというか、ずっと目を付けてた人が度重なる審査の結果、合格したというか」

「え、え？なに？どういうこと？」

私より圧倒的に賢くて、頭の回転が速い弟。彼はややこうして、私を置いて話を進めることがある。

それは大抵、無理くり自分の話を通そうとしている時であるからして、どうにか食らい付こうと、するが――

「だから姉さん、そろそろ旦那さんをもらおうね♡」

「え——？」

すぐに投下された爆弾により、あんまり優秀ではない私の思考能力は、見事に停止した。

ロレーシュ。我が実弟。

王弟であり、国の政治の中枢。そして、行動力お化け。

未来の王配となる男性と面会したその席で、私は弟から式の日取りを伝えられた。

そしてそれと同時に、私の居住区兼職場である宮の改修も一方的に告げられる。

あれよあれよと挙式の準備が進められ、婚約者となった文官の男性とはほとんど会うこともないままに形だけが整っていく。

セーレさん。名前と出自、勤務態度と大まかな性格のみを知って

いる婚約者。近々、私の夫になる人。

とても綺麗な方で、中性的なお顔が印象的だった。

襟足だけ長い薄茶色の髪はどこかふわふわとしていて、柔らかさそうで。彼の柔らかな雰囲気と、とても合っていた。

けれどイマイチ、あの人と夫婦になるのだという実感が湧かない。それも、仕方がないことなのだろうけど。

だって何もかもが怒涛の勢いで押し寄せてきているのだ。実感している暇などない。

「……………」

何もかも準備が済み、まだ世継ぎを産む予定は無いのでしつかりと避妊薬を飲んで。スケスケで破廉恥な夜着姿で侍女にポイツと夫婦の寝室に捨てられ——いや。送り届けられた私は、特大ベッドに腰掛けながら半ば放心していた。

（なんだ……なんだ？）

なんだったんだ……？と首を捻るが、答えが出なければ脳内は真っ白なままだ。

せめてもの救いは、国民やいつも世話になっている魔術師達が私の結婚を盛大に祝福してくれていることだ。

挙式当日の今日なんて丸一日仕事を肩代わりしてもらっているのに、魔術師達は沸き立っているらしい。

魔術師が集まって水晶玉に魔力を流す水晶の間では、常に私の話題が尽きなかったと聞いた。

ただ、私だけが置いていかれている。いや、強引な弟に引きずられてここまで来たというか――

（う、うーん……ちよつとずつ、順応していこう……）

慌てた結果こけてしまい、大泣きしながら弟に手を引かれている

幼少期の記憶が甦る。

——なんとも言えない心地になった。

そうして私が苦い顔をしていると、コンコンとノックの音が響く。私が入ってきた方とは、反対側のドアだ。つまり、夫となった人の私室から、そのドアがノックされている。

「……あつ、ど、どうぞっ！」

私は慌てて返事をしてから、すぐにしまったと息を飲んだ。

これでは、女王らしくない。

（や、やってしまった……）

私が青褪めるなかで、くぐもった声が「失礼します」と告げる。

そして私がわたわたと慌てていたのをどうにか抑え込んだ瞬間、視線の先でガチャリとドアが開いた。

「——陛下。お近くに寄ってもよろしいでしょうか」

床に膝を突き、臣下の礼をする夫となった人。

湯浴み後なのか、薄茶色の髪が少しだけ湿っているように見えた。まるで騎士のようね……と考えて、頬がほんのりと赤く染まる。

そうして私はそんな彼のことを暫しぼんやりと見つめ、遅れてハッとした。

「あ……っ、こ、ここは、貴方の部屋でもあるのです。そんなに畏まらなくとも、構いませんよ」

既にいくつも重ねてしまった失態を押し流そうと、早口になって遠くから彼を宥める。

立ち上がりかけた腰をどうにか寝台に縫い付け、私は内心で心臓をバクバクさせながらゆるりと頷いてみせた。

「お心遣い、痛み入ります。それでは失礼して……」

「……っ」

立ち上がり、静かにこちらへ歩み寄ってくる彼を見て、私の胸がドキリと鳴る。

知ってはいたが、とても背が高い。

一步、また一步と歩みを進める度に薄茶色の髪がふわふわと揺れ、透き通るような緑色の瞳が明かりに照らされてキラリと光った。

中性的で、美しい顔立ち。スラリとした手足は今、ほとんどバスローブに隠れている。

今まで数回だけ顔合わせをして、ほんの少ししか話したことのない、夫。

弟からは心根が綺麗で、優しくて穏やかな人と聞いているが——
こちらは国の頂点でありながらも、かなりの小心者だ。

どこまで素を見せていいものか、と悩んでしまう。

「陛下——お手に触れてもよろしいでしょうか」

「え、ええ」

すぐ傍までやってきたセーレと言う名の夫。

その彼がまたもや跪き、左手を差し出してお手をと望む。

私はおずおずと右手を前に出し、彼の大きな手に乗せた。

「ああ、麗しの君……わたしは、胸がいっぱいで——まるで夢を見ているかのような気分なのです」

「え？そ、そうなの……？」

なんだ？意外と昇進欲があつたのか？と首を傾げると、美しい顔にゆるりと笑いかけられた。

その顔面の破壊力に、私は顔へ一気に血を上らせる。

けれどそうして赤面していると、じっとこちらを見上げる翡翠の瞳が、熱に浮かされたように濡れていると気付いた。

瞬きの度に長い睫がふさふさと揺れる様が美しく、私は手を取ら

れているのも忘れて彼に目を奪われる。

「もし許していただけるのならば、二人きりの時だけ貴女様のことを『姫』と呼ばせていただきたいのです」

「姫——？ 私、もう姫という立場でも年齢でもないのだけど……」
右手を胸に当て、頭を垂れて乞う人に首を傾げる。

いくつになっても姫は姫であるが、『姫』と呼ばれる人間はどうしても幼い印象があつた。

そう主張する私に、セーレは形の良い眉の尻をほんのりと下げる。
「その、実を言いますとわたしは、幼い頃に貴女様にお会いしたことがございました。それ以来ずっと、貴女様に憧れているのです。
文官になったのも、貴女様の影響なのです」

「……そう、なの……？」

セーレの言葉に記憶を辿ってみるが、思い当たる人物は該当しな

かった。

でも幼少期には両親と共に、様々な同年代の子供に会って将来について話した記憶がある。なので、その時のことなのだろう。

（——こんなちっぽけな私に、憧れて……？）

学院に通っていた十代の頃まで抱いていた夢は、とうに砕け散った。

今や私は、毎日水晶玉に手を乗せてぼんやり過ごすだけ。そんな、形だけの女王に——憧れてきたと言うのだろうか。

（幼い頃——そうね）

そっと目蓋を下ろして、遙か昔のことを思い出す。

父様の後を継いで、私が立派な女王様になるの。この国をより良いものに、変えていくの。民が幸せに暮らせていけるようにいっぱいいっぱい考えて、素敵な女王様に——

「やっぱり、駄目でしょうか。陛下に姫なんて、失礼ですよね……」
「……あつ、いいえ！ 気分を害したわけではないのです。好きなように、呼んでください」

思考に耽っていたせいで、いらぬ誤解を与えるところだった。
慌てて許可を出せば、ふにやりと下がっていた秀眉が上がり、ただでさえ眩しい顔が、パアツと輝いた。

「ありがとうございます……！ ずっと、貴女様を姫と呼んで仕えることを夢見てきたのです。その夢が今、叶いました……！」

「そ、そう。それは、よかったですね」

下から握られたまま手を、上からも握られて両手で包み込まれる。
その上で手の甲を優しく撫でられるものだから、私は気恥ずかしさと気まずさで落ち着かなくなってしまった。

「ああ、姫……姫様……っ！ わたし達は夫婦になった、そうでござ

いましょう？」

「え、ええ。そうね」

うつとりと見上げられながら、熱烈に語りかけられる。

その熱量に少しだけ圧されている私は、逃げ出しそうな体を必死に縫い止めていた。

「では貴女様を、『わたしだけの姫』と形容してもよろしいでしょうか？」

「ええ？ まあ……構いません、けど……」

「ありがとうございます！」

キラキラと、笑顔が輝いている。

穏やかで陽だまりのような性格をしていると聞いたが、想像していたものより遥かに情熱的だ。

「ああ姫……っ♡わたしの、姫様……♡」

「……、……」

挙げ句の果てには両手で恭しく持ち上げた私の手へ、頬擦りまで始めた。

どうすればいいのか分からず静かに戸惑っていると、蕩けた緑の瞳がちらりとこちらを見上げる。

「貴女様を姫と呼んで、愛すること。それも、わたしの夢だったのです。それがまさか、現実になるだなんて」

「そ、そう……。おめでとう……。ございます?」

この返しで合っているのか?と首を捻りながらも声を掛ける。

すると、「ありがとうございます!」と美貌がまた輝いた。

「姫様は、わたしのことをよくご存知ではないでしょう?これからじっくり、知っていただくさいね」

「ええ。ありがとう、そうします」

未だ右手が解放されないなかで、急に真面目な話をされたので動揺しつつも素直に頷く。

この人はきつと、私のことをよく知っている。けれど、私はよく知らない。

だから関係性を深めることを焦らなくても良いと言ってもらえることは、とても助かった。

「隣に、座ってもよろしいでしょうか？」

「もちろんよ。……ねえ、毎回許可を取る必要はないわ。私はもつと、気楽にしてほしいのです」

腰を上げたセーレが、中途半端な体勢でパチリと瞬く。
考えもしなかった、という顔だ。

「確かに、仰る通りですね。……すみません。貴女様を崇めるあまり、貴女様のお気持ちを考えておりませんでした」

「あがめる……」

そんなに大した人間じゃないんだけどな、と視線を落としていると、寝台のマットが右に傾いた。

左側の腰へ彼の手が触れ、抱き寄せられて。距離の近さに驚き、私は勢いよく顔を上げる。

「……っ♡」

彼から聞こえる、息を飲む音と、それに続く唾液を嚥下する音。爽やかなグリーンの瞳の奥でゆらりと炎が燃え上がり、居たたまれたさに視線を逸らそうとすれば、それを阻むかのように腰を更に引き寄せられた。

「私の、姫……どうか目を逸らさないで」

「え、ええ……」

それが夫の望みであるのなら、叶えるべきであろう。

私はあついあつい視線を真っ正面から受け止めて、彼の瞳を見つめ続けた。

「ああ……お可愛らしい……♡本当に、愛くるしい……♡」
「あ……ありが、とう……」

粘着質にも感じる熱視線が、じいっとひたすらに、私の顔を見つめている。

唇に痛いほどまでの視線を浴びて、私は思わずきゅつと下唇を噛んだ。するとまた、「ああ……」と彼の口から感嘆が洩れる。

「どうかわたしに、口付けの許可を――」

「く……っ!?……あ、え、ええ、そうね。夫婦、だものね」

まさか、挙式でした額へのキスのことではないだろう。きつと、口へのキスだ。

こればかりは許可を求めてくれてよかった。

許可はいらないと言ったが、いきなり口付けられていたら盛大に取り乱していたことだろう。

「よろしいですか？」

「……ええ。口付け、て、ちようだい」

私は彼に向けて顔を上げ、きゅっと目を瞑る。

そうして待ち受ける私に、また浴びせられる熱視線。

目を閉じていても、じりじりとした焼けるような熱を感じる。

「姫……姫……♡いただき、ます♡♡」

「え？——んっ！ン、むう……っ」

いただきます？と首を傾げようとした瞬間。

唇に柔らかなものが触れて、ちゅうっ♡と吸われた。

そのままちゅっ♡ちゅっ♡と細かく何度も唇を吸われて、かあ

っと顔に熱が集まる。

「んんー♡んんー♡ひめ、ひめ……♡ん……♡」

「ふ……っ、んっ？ん、う……♡」

ぬるぬるとした熱くて柔らかいものが、唇の表面をぬろぬろと撫でる。

舌、だろうか。目を閉じているから分らないが、たぶん私は、唇を舐め回されているのだ。

「はーっ♡はーっ♡おい、し……♡♡ああ、姫……♡♡」

「ん、んっ♡ふう……、……あうっ!？」

息の苦しさにパカッと口を開けば、すかさず彼の舌が隙間に入り込んだ。

軟体動物のようにうねうねと動くそれが上顎を撫で、頬の内側を撫でて。奥で縮まっている私の舌に、絡み付く。

「だえきっ♡♡だえき、あまあっ♡♡もつと、ください♡♡」

「んっ、ん、ん……？ふ、う……♡」

彼が体を低くして、下から私の口内をまさぐる。

開きっぱなしになっている私の口からは、彼の口へと唾液が流れ込んでいった。

「はあっ、はあ……っ！うつま♡♡姫、姫の唾液……っ♡もつとっ♡♡」

「え、ええ……んっ♡ふぁ……♡」

勢いに気圧されながらも、上から彼と唇を合わせてねちねち♡と舌を絡め合わせる。

とろとろと自動的に彼の口へと流れ込む唾液は、恍惚とした表情で飲み下されていった。

「ふーっ♡ふうーっ♡はあ、はっ♡」

「ン、ふう……っ♡あ、んっ!?んんっ、んっ♡」

そうして、やたら息が荒いなと思いつながらもそのまま逃げずに舌を差し出して、いれば。その舌をベロベロと舐め回されながら、くたつと力の抜けた体を押し倒された。

寝台に仰向けに倒れた私の上へ、セーレがのそのそと覆い被さってくる。

「あー可愛い、可愛い、可愛い可愛い可愛い可愛い♡♡♡♡♡ほんとに、好き♡♡♡愛しているよ、俺の奥さん♡♡♡♡♡」

「あえ……？あ、う……？」

惚けていたなかで、チラリと危機感が顔を出す。

私は自分の体に股がり、上からこちらを見下ろしている美貌の人を見上げた。ドロリと蕩けた瞳は私だけを見つめ、粘着質な視線が体に絡み付く。

深い意図があるわけではなくチラリと視線を下ろせば、バスロー

ブの中心が、不自然なほど隆起していた。

（あ……に、逃げなきゃ……）

なんだか、一人称も最初と違うし。穏やかとは、縁遠い気もする。あの優秀な弟が間違うわけがないと思いつつも、何か手違いがあったのかもとの向きを変えようと、するが——上に乗られているせいで、動けない。

「あの……」

「……ん？ はは、逃げられませんか？ それに、逃がしません♡可愛い可愛い俺のお姫様♡どうか積もりに積もったおもーい愛を、受け止めてくださいね♡♡♡」

「ひ、ひえ……っ」

じわりと浮かんだ涙を、熱い舌でべロリと舐め取られて。

私はブルブルと震える体を、撫で回された。

スケスケの夜着を剥ぎ取られて全裸に剥かれた、その瞬間の。
ギラギラと光る瞳から注がれる纏わり付くような視線に、私の虚勢は見事に取り払われてしまった。

「うう、こわいよう……こわい、よう……」

「大丈夫、大丈夫……♡ン、ちゅっ♡こわく、ないですからね……♡んん、ちゅうつ♡」

仰向けに寝転がっている私の左肩に口付け、恍惚とした表情でれろれろと舐め回す美貌の人。

出したままの舌で肌を撫でながら、次は左腕へと移動する。

「ひめ……♡ひめえ♡♡かわいい♡すきい♡♡」

「あっ、んん……♡ふぁ、あっ♡」

腕を舐めていた口がその横でふるふるしていた左乳房に狙いを定

め、柔らかい丘を唇で食む。

緩い快楽を受けて私が小刻みに体を震わせていれば、彼の唇が少しずつ、その中心へと近づいていった。

「ん、ぷっくりしてて、かわいいですね……♡」

「きやつ、あん……！んんうっ♡」

先端の尖りがあたたかな口内に含まれて、ちゅぱちゅぱと舐めしやぶられる。

急にやってきた刺激に私はビクビクと体を跳ねさせて、イヤイヤとかぶりを振った。

「おっぱい、おいし……♡姫のおっぱい、ぷるぷるモチモチで♡♡ちんぽが、痛いです♡♡」

「やあ……！こわい、こわっ、ああっ♡」

足へゴリゴリと押し付けられる硬いものが、こわくて。イヤイヤ

を続けていた私は、じゅるるっ♡と乳首を吸われた。

反対側の乳房は彼の手で柔く掴まれ、ぷるぷると揺すられている。

「大丈夫ですよ♡痛いことは、しませんからね……♡」

「ふ、あっ！ああ、あっ♡ん、う……♡」

ぺロぺロと舐め回された先端を前歯でカリッ♡と噛まれ、右の先端は指先でコリコリ♡と転がされる。

未だに硬いものがゴリゴリ押し付けられているのに。思考が気持ちいいで塗り潰されていき、恐怖が薄れていった。

「おいひい♡♡姫のおっぱい♡♡♡」

「んんっ♡ん……！あ、んっ♡♡」

コリコリ♡クリクリ♡

乳首を弄ばれて、お腹の奥が切なく疼く。

「ん♡下から、いい香りが……♡おっぱいも美味しいけど、早

くおまんこを味わいたいので……今日はすぐ、おまんこをぺロぺロ
しますね♡乳首はまた今度、じっくり可愛がらせてください♡」

「え、う……？やあ……っ」

次から次へと耳に入ってくる恥ずかしい物言いに、脳が理解する
のを拒絶している。

そのせいで目がグルグルと回るような感覚に陥っていると、その
隙に彼はいそいそと下へ移動した。そうして私の腹部に、口付ける。

「かわいい、おへそ……♡」

「きゃっ！やっ、やああ……っ」

ヘソの穴へにゆるり♡と舌を挿じ込まれて、ぬぷぬぷ♡とほじ
られる。

やめさせようと伸ばした手が柔らかな毛髪に埋まり、それによつ
て更に彼が興奮を露にってしまう。

「はいっ♡もっと下ですね♡♡すぐにクンクンペロペロして差し上げますっ♡」

「え……!?ちが、そうじゃな……っ!」

確かに頭を下に押したけれど、おねだりしたつもりではなかった。ただ私は、そんな場所に舌をいれないでほしかっただけで――

「あわっ、わっ!あっ!」

私が動揺している間に、彼が私の膝裏に手を入れて、私の両足を持ち上げてしまう。

咄嗟のことにうまく対応できず、私はあっさりと開脚させられてしまった。もっと抵抗すればよかったと青褪めても、後の祭り。

――けれども我に返り、慌てて足を閉じようとしたところで。

「あっ、あん……!」

すかさず足の間に彼の頭が入り込み、潤む割れ目へちゅっ♡と口

付けられてしまった。

「……!?!?」

あまりの衝撃に、言葉を失う。

そんな場所に、口付けられるだなんて。こういった行為があるとは知っていたが、こんなに綺麗な人が、自分の股へ口付けるなんて想像もしなかった。

「愛液、とろとろ……♡いただき、ます……♡」

恍惚とした表情の夫が、れ♡と舌を出す。

私とその光景を咂然と見守っていると、指で広げられた割れ目の中心へ、ぴちゃり♡と触れる熱く、柔らかな感触。

「ひゃ、うん……! あっ、あっ♡」

「あ……つまあい♡♡おいひい♡♡♡」

ぬりゆう♡ぐぢゅ……♡

両手でぎゅうっと私の太ももを抱えて、ぺロぺロ♡と股の間を舐め回すセーレ。嬉しそうに、ずっとニコニコしている。

「おいしい……♡ひめさま、姫様の蜜が甘くて本当にすっごく、おいしいです……♡れえ♡れうれう♡♡んー♡」

「あっ、あっ！らめ、そんな……！あああっ♡♡」

膣口の周りを念入りに舐め回され、蜜を舐め取られる。

たまにじゅじゅっ♡と音が鳴り、違う刺激が走るのは分泌液を吸い取られているからか。

「たっぷり蜜を溢してくれて、んー♡ぢゅっ♡ありがとうございます
ます♡♡れう……♡」

「んんっ♡や、中に、いれないでっ♡やらあっ♡♡なか、ほじっ
ちやだめって、言ってるのにいつ♡♡」

今度はぬるつくそこに舌を挿じ込まれて、ぐちよぐちよと掻き混

ぜられる。するとその刺激でまた、蜜が溢れてしまった。

「ああっ、あっ♡んんうっ♡ふぁ……っ♡」

丁寧にな丁寧に口で愛撫を施されて、快感に不慣れな体が少しずつ拓かれていく。

私は抱いていた恐れを大きな愛でまるっと包み込まれて、感覚が気持ちいいで塗り替えられていった。

「もっと、もっとください♡ここも、してあげますから♡♡」

「——きやううっ!？」

平たくした熱い舌で下から上へね……つとりと舐め上げられたのは、入り口の上の小さな突起。

衝撃に目を白黒させていれば、二本の指で横の肉を避けられて、ねとねと舐め回され出す。

「あううっ♡♡やああッ♡ああっ！こわっ、アッ！ああっ♡♡」

少しの間だけ遠くにいった恐怖が帰ってきて、強い刺激にビクビクと腰が戦慄く。

包皮の上から尖らせた舌先で擦られたと思えば、その舌先が皮からぴよこりと顔を出している芯の先をつついた。

「ふふ、大丈夫……ずずっ♡ですから、ね……♡」

「ひゃ、あっ！ふあっ……んんッ！」

トロトロと溢れ出した蜜を時折ズズ♡と啜られ、ゴクンと飲み下される。それから今度は、皮の隙間に舌先を挿じ込まれて、芯を直接舐め回されることとなった。

「ジッ！んっ、んうっ！それだめっ♡だめだめっ♡♡」

「……ふふっ♡んーっ♡れうれう♡」

強い刺激に体を痙攣させ、悶えていると——今度は器用に口で皮を捲られて、剥き出しになった淫芯を舐め回される。

「ふーっ♡ふーっ♡」

「ひぎゅッ！——ッ!?~~~~ッ!!」

剥き出しの神経をぬりゅぬりゅ♡と執拗に舐めしゃぶられて。
一気に頭も視界も真っ白に染まり、硬直した全身がビクンビクンと跳ねる。

「お……!?お、おお……ッ!!」

それでも尚、舌で刺激されるクリトリス。

飴玉を転がすようにズル剥けの芯を舐め転がされて、時折ピンピンと弾かれる。

「ふぎゅっ♡♡ヒッ♡♡お、お、お♡♡♡」

ぞりゅぞりゅぞりゅっ♡

舌の表面の小さな突起でクリトリスの表面をこそがれ、磨かれる。
たまらずプシッ♡と何かを吹けば、ガチガチになって震える芽を、

潰された小さな芽が、尚もグリグリと擦られている。

パクパクと開閉を繰り返してわけが分からないまま絶頂を繰り返す蜜口が、そろりと撫でられた。

（ろれーしゅ、ろれーしゅ、こわいよおっ！ たすけて、ロレーシユ！）

私は心の中で弟の名前を呼び、助けて助けてと連呼した。

閨教育は受けている。けれど、こんなことになるだなんて聞いていない。

腰から下は溶けてなくなってしまうそうだし、お腹の奥はズンと重く、甘くて苦しい。

蜜口を撫でる複数の指が、今にも入ってしまいそうで——それが中に入ってしまったら私はどうなってしまうのだろうかと恐怖する。

——だがその反面、そこには大きな期待も隠れていた。

「かわっいい……♡♡ボロボロ泣いて、ドロドロになっている俺のお嫁さん……♡俺だけの、姫♡♡♡」

「お、お、お、お……ッ!!♡♡♡」

ぢゅううっ♡♡とつよくつよく、剥き出しのクリトリスが吸引された。

更には、ガチガチに硬くなっている芽を吸引したまま、唇で引っ張られて。私はグルンと上向いた眼球で、バチバチと弾ける光を見つめた。

「お、ごっ♡お、ぐっ♡♡♡」

「ん……お潮、すごい……♡」

じゅうう♡れるれるるっ♡♡ぢゅうっ♡♡ゾリゾリ♡♡

ぶしゃぶしゃと盛大に『お潮』を吹き、激しく開閉を繰り返す蜜口。その縁を、指でなぞられる。

幾重にもなつて襲い掛かる快樂の波に耐えきれず、私は白目を剥いたまま舌を突き出し、ひたすら忘我の彼方へ吹き飛ばされていた。

「ふふ……♡イき顔、可愛い……♡もっと、しちゃう♡♡」

「い……、ぎう……ッ!？」

はみ……♡と噛まれた芽が、少しずつ少しずつ、圧を加えられていく。

痛みが生じないギリギリのラインを責めて、ギチギチと噛み締められているクリトリス。

視界が真っ赤に染まり、私が思いっきり舌を突き出してカタカタと体を震わせていれば——彼はそのまま顔を、引いてみせた。

するとゾリ……ッ!と擦れたクリトリスが、にゅふんっ♡と解放される。

「——……!!!!」

言葉なく喘いで、盛大にお潮を吹いて法悦を極める。

そんな私の震える淫芯は、剥き出しのままぬろぬろ♡と舌で擦られ、コリコリ♡と転がされていた。

「~~~~ツツ!!……ツ、ツ!!」

目の前が忙しく白へ黒へと切り替わるなかで、コリコリコリ♡クリクリ♡と執拗にクリトリスが刺激されている。

お股はもう、大洪水で。パクパクと開閉を繰り返す入り口が、優しく撫でられていた。

「んん……♡ん、ん……♡」

「——ヒッ! イッ、う……っ!」

今度は奥歯でギチツ♡と芯を噛まれて、そのまま優しく圧迫される。私は神経の塊をグッ、グ……ツ♡と断続的に潰されて、視界を赤く染め上げた。

「ひ、ぎ、うう……ッ!!♡♡」

歯で圧迫されている剥き出しの芯が、器用に舌先でクリクリ♡と弄られている。

たまらずブシヤツ♡と盛大にお潮を吹いた小さな穴を彼の親指が撫で——激しく蠕動している女性器の中に、ぬろりと細長いものが入り込んだ。

「……!?!? ……!! ……!!!!」

「ん……ぬるぬるだし、一本なら余裕かな……?」

ガツクンガツクンと体が大きく痙攣し、声無く喘ぐなかで。どんどんとソレが、中へ入り込む。

そうして彼の手で中を探られる最中にも、私はぺちよぺちよとクリトリスを舐め回されていた。

「二本に、してみますね」

「……ッ、っ♡♡♡ッ!?!?」

話し終えるなり、舌でピンピンとクリトリスを上下に弾くセーレ。そんな彼は刺激を受ける度に体を跳ねさせる私の中から指を抜き、質量を増やしてまた中に振じ込んだ。

ゆっくりと侵入してきて、根本までず……っぷり♡と埋まった二本の指が、内壁を優しく撫でる。

「うん、大丈夫そうだ♡ではこのまま、慣らしますね」

「……ひっ♡♡♡うっ♡……ッ♡♡♡」

ぬぐぬぐと前後する指が、時折内壁を押し広げる。

初めてではあるものの、既に沢山気持ち良くなったからか、彼が慎重に中を撫でているからか。まるで痛みは感じなかった。

「ふうっ♡ふっ、う、んっ♡」

散々達したクリトリスへの刺激が止み、女性器の周辺に口付けの

雨が降る。

彼の右手は絶えず中を刺激し続けている。だがそれでも、突き抜けるような強烈な快楽が無くなり、私の霞んでいた思考は次第に晴れ出した。

「ふ、ああっ♡あの……っ」

なかなかの時間は要したが、どうにか喋る余裕ができた私は、恍惚とした表情で内腿や足の中心に口付けている夫に声をかける。

けれど消え入りそうな声だったためか、彼には届かなかったようだ。

「あ、のっ！せーれ、きいて……っ！」

「ん……？」

声のボリュームを上げて再度呼び掛けると、やっと届いた。

夢中で恥丘に口付けていた彼が顔を上げる。

「どうかされましたか？」

「う……っ」

目元を赤くして微笑む、その色気。モロに当てられた私は、ずつとぬぐぬされている中をキュッ♡と締め付けてしまった。

するとセーレが、チラリと一度だけ視線を下に送る。

「あの、もっと、んっ♡ふうっ♡……あ、ゆ、ゆっくりが、あうっ♡♡……いいです」

「………」

指が度々いいところを擦るせいで、主張が喘ぎ混じりになってしまったのが恥ずかしい。

赤面して下唇を噛む様を、じっと見つめられている。

「……でも、怖いのでしょうか？ ならば、ゆっくりよりも駆け足で進んだほうが、よろしいかと」

「で、でも……」

確かに先ほどまでの私は、怒涛の勢いで快樂が流れ込んできて、怖がるどころじゃなくなった。

そんなことを感じる余裕もないほど追い詰められて、真っ白になってしまったのだ。

——けれどそれを思い返すと、怖いとも思うわけで。

「それに、わたしが我慢できないのです。ずっと恋い焦がれてきた貴女と、はやく一つになりたい」

「あ……」

一心にこちらを見つめる瞳は、鮮やかな緑色をしているのに、ゴウゴウと燃えているような熱を秘めていた。

あなたがほしい。そう言外に告げられて——私は拒絶する言葉を吐けなくなってしまう。

「どうか貴女様を求める哀れな男の願いを、叶えてはいただけませんか？」

「あうう……」

言葉を尽くして乞われ、私はとうとう唸ることしかできなくなつてしまった。

弟なら、駄目なことは駄目と言えるのだろう。けれど私は、無理だ。だからこそ、内政を取り仕切るのに向いていないというのもある。

「——わ、わかりました。貴方の好きに、してください」

「ああ……ありがとうございます、姫様。本当に嬉しいです」

けれど私が折れたことで、夫が嬉しそうに笑うから。これでよかったのかな、と胸を撫で下ろす。

——けど、そこで。

「ではそろそろ、再開しましょうか。ちよつと刺激を強めますが、耐えてくださいね♡」

「え、きゃ……ッ！あっ、んん、んっ♡♡」

それまで止まっていた指の動きが再開し、ぐちゅぐちゅと音を立てながら分泌液が攪拌され始めた。

「あうっ、こわ……っ♡こわ、いよおっ♡」

その刺激は少しばかり、私には強くて。お腹の奥から迫りくる感覚に、私は感じながらも少しだけ、怯えていた。

「大丈夫、大丈夫……♡」

「あっ、あっ！だめ、ンンッ♡♡んっ♡」

宥めるように左手で内腿を撫でられるが——刺激が増して、却って辛い。

だめだめとかぶりを振っても、にんまりと笑ってこちらを見上げ

る彼は、ねつとりと内腿を撫で続けた。

「ふうっ♡ふーっ♡んあ、あっ♡」

「ふふ……♡中が、トロトロになっっていますよ？　こうして指を動かしたら……ほら♡もつとぐちゅぐちゅって、音が鳴る」

「やあぁっ♡♡」

恥ずかしい、とまたかぶりを振っても、にこにことされるだけ。

自分の下半身からはずうっと水音がしていて、それが耐え難いほどに羞恥心を煽るのに——それすらも、気持ちがいい。

「うん、二本でも慣れたようですね。もう少し指を増やしますよ♡」
「えっ!?……あっ、んっ！」

彼の方が、頭の回転が早いのだろうか。

私が驚いている間に、ずるんっ♡と指が抜けていってしまった。

ズリズリ♡と中を擦った感覚に、私は遅れて体を震わせる。そう

していれば、入り口に束ねられた複数の指の、先が触れた。

「ふや、すっ？なん、何本に、なるの……？」

おっかなびっくりで問いかければ、優しく微笑んだセーレが「三本ですよ」と答えて視線を下に向ける。

その動きに釣られて、私も視線を下ろした。

すると、大きく開脚した自分の足のあわいに、彼の右手五本の内、三本が触れていると見てとれる。

しかしその内の二本——人差し指と中指がテラテラと光っているのも視界に入り、私はかあぁと全身を熱くさせた。

さっきまで、私の中に入っていた指だ。そう理解すると共に、こぷり♡と奥からまた、蜜が溢れ出す。

「入れますよ。ゆっくり深く、呼吸を繰り返してくださいね」

「え、ええ……っ！……あっ♡」

ぐちっ♡ぬちゅ……♡

入り口を割り開いて、太いものが入り込んでくる。

今までにない大きさに、忍び寄る恐怖。

「——あっ！だめ……っ♡♡」

「ふふ……♡」

しかしクリトリスに走った刺激と熱に、見事に思考が霧散した。

ぺちよりと舐められてから、温かな口内に包み込まれたのだ。

「あ、んっ♡♡ああっ♡ん、くう……♡」

にゆく、にゆく♡ぐにゅっ♡ぬちゅっ♡

包皮も一緒に舌で優しく撫でられて、硬くなっている芯がつぶさに快楽を拾い上げる。

「おッ♡♡♡お、お……っ♡♡」

三本の指が短い間隔でズリズリ♡と前後しているその上で、じゅ

るっ♡と音を立ててクリトリスが吸引された。

「ん……♡ぢゅっ、はあっ♡ぢゆるっ♡ぷりぷりで、かぁいい……♡」

「お、あッ♡♡あぁっ♡だめッ♡それだめえっ♡♡」

見つけた膣内の感じる場所を、なでなでされて。更には痛いほどに勃起し、僅かに皮の捲れた淫芯をちゅくちゅく♡と舐め回される。

「姫様のおまんこ、俺の三本の指を美味しそうにモグモグして……

♡姫様のクリちゃんは、ペロペロちゅうちゅうされて、嬉しそうに跳ねていますね♡」

「や……！おッ!?おッ♡♡♡」

あまりにも恥ずかしすぎる物言いにかぶりを振った私であったが、すぐにクリトリスにむしゃぶりつかれて頭が真っ白になる。

「次から、んぢゅっ♡もう駄目っていう時は、れるれるっ♡じゅ

るるっ♡イクイクって、言っってくださいね♡♡」

「あゝあゝ……ッ！♡♡♡」

閨教育で入り口付近にあると聞いた性感帯を、束ねた指の先でゴリゴリ♡と抉られている。

その上、器用に唇で皮を剥かれたクリトリスが、平たくした舌でゾリゾリ♡と容赦なく擦られていた。

そしてその刺激によってビク、ビク♡と痙攣する膣内を更に追いつめ込むようにぐちゅぐちゅ♡責め立てられ、私は背を弓形に反らしてガクガクと全身を痙攣させた。

「イ……ッ♡♡♡ぐッ♡♡イグ、いっぐう！♡♡」

「……♡♡♡」

じゅぶり♡と指が奥深くまで埋まってずりゆずり♡と擦られる蜜道も、しつこく舌で磨かれてたまにソリソリ♡と歯で搔かれる

クリトリスも。とにかくにも、気持ちが良すぎて。

どうにか言い付けを守った私は、激しい責めに耐えきれずに、呆気なく果ててしまった。

「はーっ♡ん、ぢゅううっ♡んっ、ぢゅるっ♡」

「ひ、うう……っ！イキ、ましたっ♡♡イいつ♡きいつ♡まひっ♡♡おっおーっ！イツぐう！♡♡♡」

きちんとイクイク言ったのに、セーレがやめてくれない。

指で皮を剥いて固定された淫芯は、彼の唇によって、周りの皮膚ごとぢゅぱぢゅぱと繰り返し引っ張られていた。

皮膚を引き伸ばされて、解放される瞬間の衝撃は言葉にならない。ぎちゅっ♡と引っ張られて、びちんっ♡と伸びた皮膚が元に戻る度に、私はびゅっ♡びゅっ♡とお潮を吹いていた。

「お、おっおーっ！♡♡おーっ♡♡♡」

柔軟に伸びて、三本もの指を根本まで咥え込む『おまんこ』は、じゅぽじゅぽ♡と素早く抜き差しを繰り返されていて、内壁が熱いほどだった。

私が良い反応をした場所は的確に刺激され、トロトロと奥から流れてくる愛液は、彼の指が泡立てていく。

今となってはゴリユゴリユ♡とイイところが擦れる度に、毎回私の体はイクイク♡をしていて。

もっとももっとと貪欲に求める奥への入り口が、カリカリ♡と爪で優しく、搔かれていた。

「イグッ♡♡イグイグッ♡♡イ……ッ！お……ッ♡♡♡」

「……ははっ、姫様はイクイクが上手ですね♡♡このままたくさん、イクイクしましょうね♡♡」

泡が何度も弾けるように——私の体は簡単に絶頂を重ねるが、お

腹の奥にはどんどんと重い感覚が溜まっていった。

このまま続けたら、おかしくなってしまうそうなのに。頭は働かず、体を動かす余裕もないから、私はされるがままでしかない。

「はい、イク、イク♡んーっ♡できましたね♡♡お上手です♡♡ではもう一回。イク、イク♡…ああ、できましたね♡おめでとうございます♡♡」

「へおっ♡♡…っ♡♡…♡♡」

ぐっちょ♡ぐっちょ♡とおまんこが掻き混ぜられ、柔軟性を確かめるように僅かに開かれた指で、隅々まで膣壁を撫でられる。

「クリちゃん、も…いふ、いふ♡♡」

「ひ…っ！いっ、ぐ♡♡♡」

私は指で愛液を攪拌しながら、皮を剥かれたクリトリスも舌で絶え間なく刺激されていた。

舌先でコロコロ♡と転がされたかと思えば、ぐりゅうっ♡と潰されて揺さぶられるクリトリス。

「おッ♡おおーッ!!お、おおッ♡♡♡」

そこから生まれるあまりにも強すぎる快感に中が激しく蠕動する。だがそれでも巧みに動く彼の指で、膣壁は容赦なく愛でられ、次第にビクビクと痙攣し、達するだけの場所と化していった。